

刊夕日七月四



刊日
定価 一月五拾五圓
廣告料 五圓
日曜祭日の翌日休刊
発行所 常警毎日新聞社
電話 六三〇
印刷所 常警毎日新聞印刷株式会社

映畫脚本 旅合羽 (三)

一丁目 木津茂太郎

(タイトル)
彼は何處へ行つたのだらうか
峠。
峠より見た周囲
山々が波うつてゐる
沼が見える
それから市藏の居た町が
峠
一本の道を馬子が馬を引いてゆく——谷間に落ちる水
空にそより立つうつろうたる樹々、馬子の唄ふ口もと
市藏が辻堂の椽に立ち眺めてゐる
「あゝもう生れ故郷の町は遠くなつた、もう見ることあ出来ねえのだ」と
獨りごちて辻堂の中へ入る

また散つて
星が移つて
——何年かの後
おやすは——もう二十五年になつてゐる。おやすは、今番頭の大作と夫婦になる約束が出来てゐる。おやすが歩いてゐる。町の年に一度の祭である
(タイトル)
「鬼だ」
といふ評判のばくち打
荒川の又助
又助が歩いて来る。
又助はおやすに惚れてゐるので、おやすを追ひ廻す、おやす又助をさらつて其處いらを逃げ廻る
追ふ又助のむごい形相 (大寫)
人々が見てさゝやき合ふ
(タイトル)
そんなことが度々あつた

(タイトル)
ある一夜であつた
又助は子分を大勢つれて川田屋(おやすの家の酒屋)へ押入りおやすをかついで奪つて行つた
父徳兵衛母お万約束の夫大作はそれへ悲しんでゐる
街道
又助一味おやすをかついでゆく
「川田屋」と書いたく、りが開く三度笠で旅合羽の男がはいつてくる
(タイトル)
どうしたんでござんすかい
徳兵衛はおどろいて
(タイトル)
いえ、なに……何か御用でも……
(タイトル)
酒をすこウし一升もありやい……
大作一升樽を男にやる
男は不審相
(タイトル)

元山すみれ吟社一周年

好問 吉田青柳子

麗かや細羊放つ野の雀み
麗かの椽に移しぬ小鳥籠
麗かや幾つも乾しぬ酒袋
麗かや七面鳥の鳴くばかり
庭に干す大酒槽や麗かに

お話し下せえなお力になりやせうぜ
(タイトル)徳兵衛が云ふ
實は娘が荒川の又助といふならず者にさらはれたのです……娘が男は何故かうなづく

外科 X 光線科 性病科 科

平町 田町

安齊外科醫院

電話四七五番

意隨院入

セメント 磐城セメント株式會社
壁用材料
コールター 代理店 西村屋藥舗
ペンキ塗料
板 ガラス 平町二丁目「電三」

柔道衣 新學期特賣!

平商 御入學の諸兄を御喜び申上ます

右調度は品質確實にして斯界に定評ある優良品である
東京磐崎製柔道衣
京都正春製劍道具
右製品を責任を以て御奨めします

◆特 價◆

柔道衣	前組	2.70
甲品平刺し	一人用	2.70
三ツ揃	中人用	3.40
	大人用	3.40
劍道具	竹胴付	11.00
	極上品	11.00
	竹刀	0.80
	竹刀	0.80

特約販賣店 配達敏速

香味水位の本場録茶を
召上りませ

電三九六番
大勝園

ペンシル ナミキ萬年筆製造元

高級名筆 高級名筆

学生用萬年筆 定價二圓以上

漆黒として輝く
ラツカークリップ附
標準六種金ペン 鍍層
定價四圓五十錢以上

平町公園前
特約店 角忠 佐々木商店
電話二三三番

玉屋の
名品

玉屋洋品店

平町田町通電話六五六番

昭和産業博覽會本館正面上出品
御試用ハ弊店ニテ……種類豊富
學生向 二、〇〇ヨリ 紳士向 一七、〇〇

大和田上等兵 傷く

好間村の出身

石城郡好間村大字北好間字山崎出身第〇〇隊上等兵大和田芳保氏は去る三日滿洲方正附近の匪賊討伐で名譽の負傷した旨同村役場に入電あつた傷は左腕の貫通創である因に同上等兵は同村大和田重美氏の次男であるが兄弟は四名で長兄は實家に在り村内中流以上の農家であると

好間十好會主催

濱三郡俳句大會

席上の選句とりぐ

石城郡好間村の十好會主催濱三郡俳句大會は五日午後六時より同村鈴木秀山氏方に開催参加者は安藤姑洗子氏を主賓として其他六十餘名に及んだが兼題は「摘草」席題は「木の芽」を互選後安藤氏の講演があり午後十時盛會裡に閉會したが當日の最高点は金成喜山氏(十一點)次点は渡邊何鳴氏(十點)である尙姑洗子氏の選句及び作句は左の如くである

肉を焼く匂木の芽に流れけり 上 鶴
思ふまゝ草摘み歩るへ日和哉 高原子
心地好く頬に打たせぬ木

の芽風 四 峯
足を投げて慰ふも居たり 草摘女 蛇 石
忘れ居し人の戀しく草を摘む 警州子
木の芽吹く夕風軽く流れけり 一 葉
降り初めし雨に明るき木の芽哉 警州子
雨含み木の芽真赤に夜明たり 同
日影みつ柔かに草を摘む 同
魚を焼く香のほこりと木の芽宿 秀 山
草を摘み吹かす風髪呆けぬ 喜山郎
照り返す湖水眩しく草を摘む 向 峯

日ねもすを波音眠むく草を摘む 秀 山
新らしき目籠嬉しく草を摘む 夢 坊
木の芽吹く水せらげば顔洗ふ 同
雨溜めし木の芽はつゝ光りけり 蛇 石
愉々し事拘きて草を摘みにけり 警州子
磯田畦人あたゝかに草摘めり 何 鳴

木の子啄む鳥に鳥來ぬ雨の技 姑洗子
雨迫る晝を灯せり木の芽丘 同

豊間青年慰勞 石城郡豊間村青年團では冬期間中消防組と協力して夜警を行つたので十日午後一時より消防組と聯合の慰安會を小學校にて行ふと

童話の集ひ

石城童話クラブ主催 十日第三小學校にて

童話研究の団体たる石城童話クラブにては来る十日午後一時から第三小學校に於て童話會を開く事となつた司會者は川崎小島氏で藤田第一、林第三、水竹第一、花澤第三各訓導の童話に配するに渡部第三、木村第二、兩訓導指揮の童話踊等あり咲き初むる櫻と共に子供等の喜び一方ならざるものがある

内郷水稲講習 石城郡内郷村農會にては九日午後一時より同村裁縫女學校に水稲栽培講習會を開催郡山農事試験場技師の講演ある由

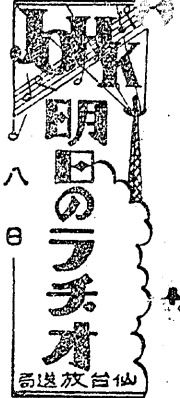
出征兵

遺族歴訪

石城郡植田署管内消防協會では管内出征兵遺族を慰問

櫻の早咲は 明今日中に

平町の有名な櫻も兩三日來の春暖に漸く蕾が色づき初めたので例年早咲きと云はれる新川堤の櫻は早いのは今日中には綻び初める模様で俄に春気分が漂ひ出し昭和産業博の開催中に本春は一層の出入を豫想し町では點燈其他迎春準備に忙し



明日のラジオ

明日は北風の風晴れたり曇つたり

今晚の部

- 後六、三〇 競馬講座「馬の改良と競馬」農林技師 佐々田伴久
- 後七、三〇 宗教講座「法然上人降誕八百周年記念を以て」増上寺貫主道重 信教
- 花七夜(第七夜)
- 後八、〇〇 落語「夜櫻」桂文治
- 後九、〇〇 筑前琵琶「兒渡邊桃年」

明日の部

- 鳥高德「高峰筑風」
- 後九、三〇 奉天より
- 後九、四〇 全國ニュース 氣象通報 番組豫告
- 前九、二〇 料理献立「はんべんとホーレン草の清汁と卵の花弁」朴澤松操 學校
- 前一〇、三〇 家庭講座「藤家具の手入及選定法」渡邊桃年

春惱し

發狂青年の縊死

石城郡磐崎村字藤原小野田炭礦坑夫中野與一の弟寅一(三)は昨年三月頃より精神に異常を呈したので監置實を設けて保護を加へて居た處昨六日午後八時頃同人の母ユウが夕食の仕度中着用衣類の襟を破り實内で縊死を遂げて居たのを發見した

裁判所便り

△石城郡内郷村大字高坂字立野七十一番地古物商木高德(三)は本年二月十五日肩書地に店舗を設けながら正規の十日以内に其の届出をなさず古物商取締法違反として罰金五圓

△双葉郡浪江町大字權現堂字新町二十二番地齒科技工齊藤晋治(三)は昨年七月八月頃免許を受けずして双葉郡川内村大字下川内山田オノ方其他に於てオノ外七名に金冠二十九ヶを施し其報酬金六十四圓を受取り齒科醫師法違反

藝妓縁高

前年に比し 約三萬圓減

平稅務署の調査にかゝる平町藝妓の昨年四月から本年三月まで一ヶ年間の縁高を見ると本玉八十六人で二十五萬二千三百四十九本金額十六萬九千七百三十三圓八十三錢半五十二人で二萬六千六百九十九本金額七千二百三十四圓四十五錢合計十七萬六

時春!!!

◎新入學生の通學に... ◎ゼヒ必要な時計を... 營業種目 時計 眼鏡 指輪 電燈 其他貴金屬

店計時堂寶白

(へ向店服吳橋諸)町川新町平





【禁轉載上演及映畫】

悟道軒 圓玉 演
近藤 紫 雲 畫

【第廿一席】

神影流の達人秋山要介

(21)

井伊家の持船が下總寶珠花に來た時、向ふから下つて來たは水戸家の持船が膨れて居りますからこれを太鼓船といふ、紺地に白で水といふ文字を抜いた旗を立て淺黄木綿の法被を着た船頭七八人が棹を取つて漕ぐ、下りの事とて流れも早い、水玉を蹴上げて船は次第に近づく、其當時水戸のお手船と來ては威張つたもので、船は威張る事が出來ないが船頭は水戸家の威光を笠に着て、傍若無人の振舞をした、本所松井町一丁目の河岸に水戸家の舟が繫いでありました、矢張丸に水の旗を立て此前を通る舟に乗つて居るせん頭は夏でも冠物を脱る、舟が當りさうになつた時に足杯で向ふの舟を押すと不埒な奴だと役人が飛出して、せん頭を縛り上げ舳から吊り下げて水を浴びせた。それは酷い事をしたさうです、今とは違つて堅川は幕府時代舟の往復が頻繁でした、そこへこんな威張る舟が居られては困ります、演者の家は相生町二丁目の河岸に營業の必要上傳馬の一倉もあり、直ぐ真向ふが水戸の繁場



をしてせん頭を助けてやる、思ふ、何と思ふものか、木で造りし船であらう、それともしで出來て居る船か、
○「イヤ此奴、不埒な奴、水戸殿の持船であるぞ」
要「儲はポーの船か」
○「ポーの船とは何だ」
要「薩摩ポー、鳩ッポー、水戸ッポーを天下の三ポーと申す」
○「無禮者め」
と云ふて、棹を取つてサツと打つて來た、要介はヒラリと身を交し、バツと水戸家の舟に乗り移り
要「成敗いたしてくる覺悟しろ」
といふと、持てる鐵扇にて舟頭をそれへ叩き倒す。イヤこれを見て驚いたは植松寅次郎
寅「先生亂暴な事をなさるな、先づお控へ下さい」
と止めたが肯入れぬ、懲りてくれると當るを幸打倒す。水戸家の役人はコハ浪籍者と引抜いて斬つてかゝつた、要介は實に更せず、さア參れとこれを相手に闘ふ、恚うなると此方のせん頭も棹を取つて水戸家のせん頭に打つてかゝる、茲に修羅場を現出した、するとこの土地の者は關宿のふな番所へこれを知らせる、此處に居つたは關東郡代伊奈半左衛門、コハ一大事なりと部下を伴れて舟早を仕立て、エイサツ／＼と掛聲勇ましく川を遡つてこれに漕ぎ寄せ
半「拙者は關宿のふな番所

○「オー竹下の舟か、今日は好い天氣だ」
などと云つて引込んでしまふ、是までにするには三百兩も遣つたさうです。さういふ譯で堅川通ひのふねが水戸家のせん頭に促まると演者の親父が行つて訛事

○「黙れ、このお船を何と思ふ」
要「何と思ふものか、木で造りし船であらう、それともしで出來て居る船か」
○「イヤ此奴、不埒な奴、水戸殿の持船であるぞ」
要「儲はポーの船か」
○「ポーの船とは何だ」
要「薩摩ポー、鳩ッポー、水戸ッポーを天下の三ポーと申す」
○「無禮者め」
と云ふて、棹を取つてサツと打つて來た、要介はヒラリと身を交し、バツと水戸家の舟に乗り移り
要「成敗いたしてくる覺悟しろ」
といふと、持てる鐵扇にて舟頭をそれへ叩き倒す。イヤこれを見て驚いたは植松寅次郎
寅「先生亂暴な事をなさるな、先づお控へ下さい」
と止めたが肯入れぬ、懲りてくれると當るを幸打倒す。水戸家の役人はコハ浪籍者と引抜いて斬つてかゝつた、要介は實に更せず、さア參れとこれを相手に闘ふ、恚うなると此方のせん頭も棹を取つて水戸家のせん頭に打つてかゝる、茲に修羅場を現出した、するとこの土地の者は關宿のふな番所へこれを知らせる、此處に居つたは關東郡代伊奈半左衛門、コハ一大事なりと部下を伴れて舟早を仕立て、エイサツ／＼と掛聲勇ましく川を遡つてこれに漕ぎ寄せ
半「拙者は關宿のふな番所

を預かる伊奈半左衛門にござる、雙方共に鎮まれ」
と云ひながら水戸家のふねに乘移つた。それを見て秋山要介は井伊家のふねに引返し
要「う、快い心持だ、サブ／＼した、豪慢無禮の水戸ッポーを驚かして遣つた、納言様の御威光をひらめかし不埒を働さ居る彼等ども偶には痛い思ひをいたすは大に藥になる、彼等の様な家臣があつては尊い水戸家の御恥辱にもなる、それゆゑ俺がちよつと暴れてやつた、四五人怪我をした者もあるが、生命には別狀があるまい、先づ以て喜ばしいことだ」
と笑つて居ります。

係の者これへ出る」
と云つたとき、舳に居た秋山が
要「控へろ、この馬鹿者、打付けたは其方の船だぞ、當方から答めるが當然だ、これへ船役人參つて粗忽を詫ろ」

耳鼻咽喉科専門
大和田醫院
平町南町
電一七〇

大塚の
學生靴!!!
耐久新製品
編上靴 六〇〇
半靴 五〇〇
不安心なるキカイ靴より、安心得る弊店の靴を……
大塚支店製靴部
電話七七番

電話番號變更
此度當店の電話番號左記の通り變更致しましたから御諒承下さい。
電話 三三七番
平驛前 阿部石炭商(店)
電話 二二七番
阿部政右衛門(宅)

平新川町十九
木村病院
電話 一六四番
婦人科 院長 木村寅次郎
内臟外科 醫學士 松永憲一
整形外科

魚清食堂部改築御披露
階上新築食堂は皆々様を御待ちしてゐます
何卒御立寄下さい
例年の通り

御見の折詰部
最大 魚折詰部……二十錢より
勉強 壽司折詰部……二十錢より
本年の折箱は特に最新式の文化折箱を使用致します
多数は特に御相談に應じます

せ印 魚清食堂折詰部
平町字二丁目
電話 六三三番